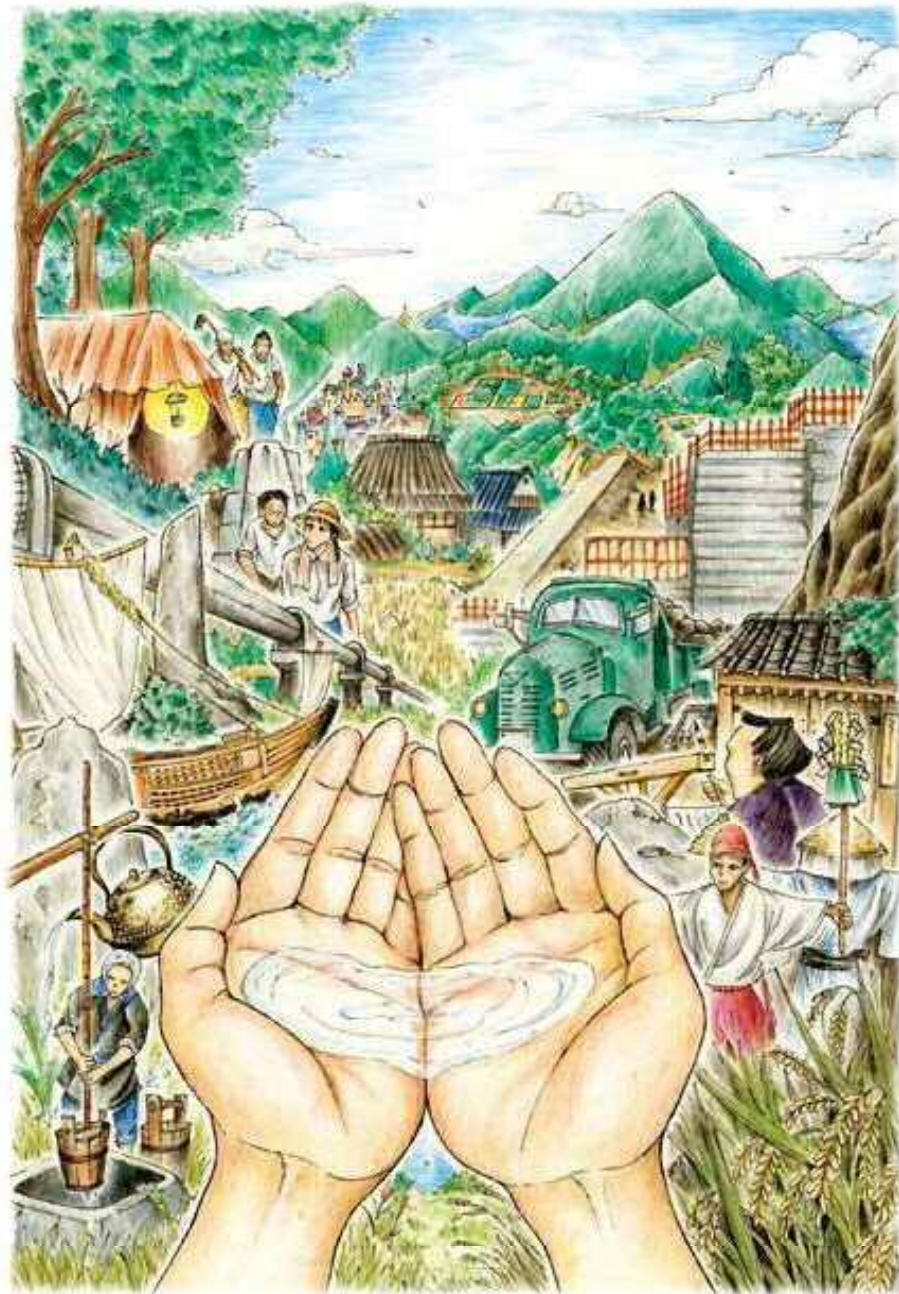


とお みず みち  
遠い水の路





# 目次

今日 <small>きょう</small> も雨 <small>あめ</small> が	1
水 <small>みづ</small> をもとめて	4
安 <small>やす</small> 心 <small>こころ</small> して米 <small>こめ</small> づくりを <small>を</small> したい	12
土 <small>ど</small> 井 <small>い</small> はため池 <small>いけ</small> になる	14
わたしたちの誇 <small>ほこ</small> り東 <small>とう</small> 条 <small>じょう</small> 川 <small>がわ</small> 疏 <small>そ</small> 水 <small>すい</small>	22



遠とお  
い  
水みず  
の  
路みち



## 今日も雨が

今から九十年前（大正十三年）の田植えのころのこと  
でした。

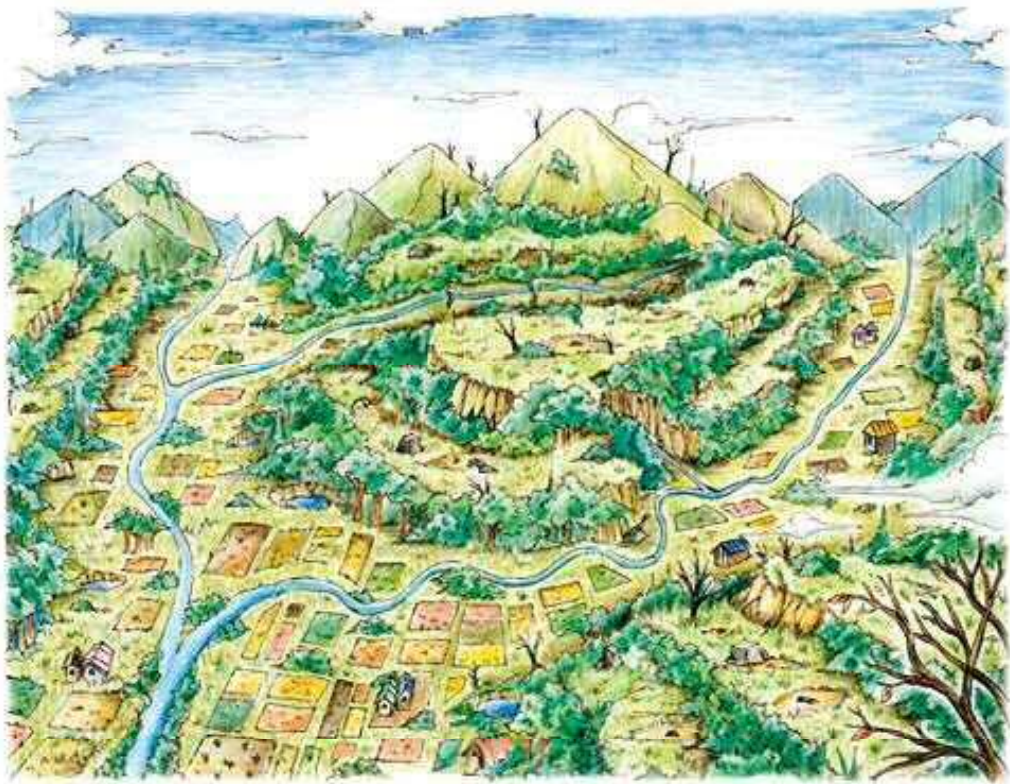
「今日も雨がふらんなあ。どう  
したものかのう・・・。」

農家の人たちは空を見上げては、  
ため息をつくばかりでした。米づ  
くりの一番大切な季節に雨がふら



ないので。田植えの時期が始まってから、もう何日も日照りが続いていきます。やっと田植えができたところで、稲の苗は大きくならずに枯れはじめていました。水が流れるはずの溝は、日照りで水が来ないためにひびが入っていました。井戸の底から汲み出した水を、苗一つひとつにやっても少しの苗にしかやれません。この年は稲に実がつかずに枯れて、山や野原の草木も赤茶色になりました。そんな景色を見て人々は、不安な気持ちでいっぱいでした。





播磨<sup>はりま</sup>地方の中でもわたし  
たちの加東<sup>かとう</sup>や小野<sup>おの</sup>は、作物  
がほとんど実らず、大変な  
被害<sup>ひがい</sup>をうけました。

## 水をもとめて

米づくりにとって水はとても大切なものです。日照<sup>ひ</sup>りの時には、水をめぐってあちらこちらで水争<sup>みづあそ</sup>いがおこりました。

すぐそばには加古川が流れているのですが、私<sup>わたし</sup>たちの住む土地は川より高い所にある





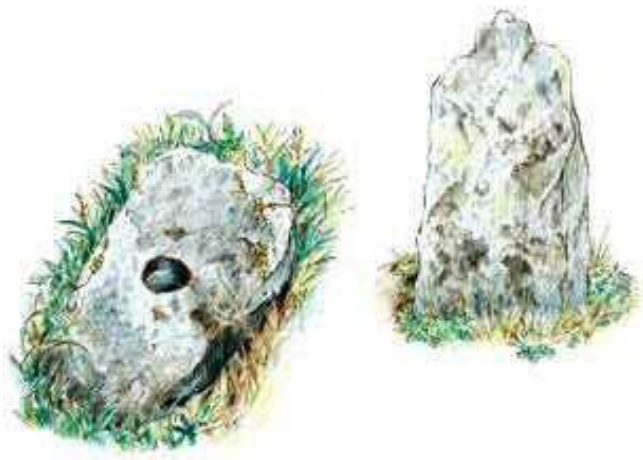
ため、そこから水を引くことが  
むずかしかつたのです。そこで  
人々は水をもとめて、いろいろな  
行事や工夫をしてきました。

昔からの行事は、現在にも  
伝わっています。日照りのとき  
には神様や仏様に雨がふり  
ますようにと「雨乞い」を

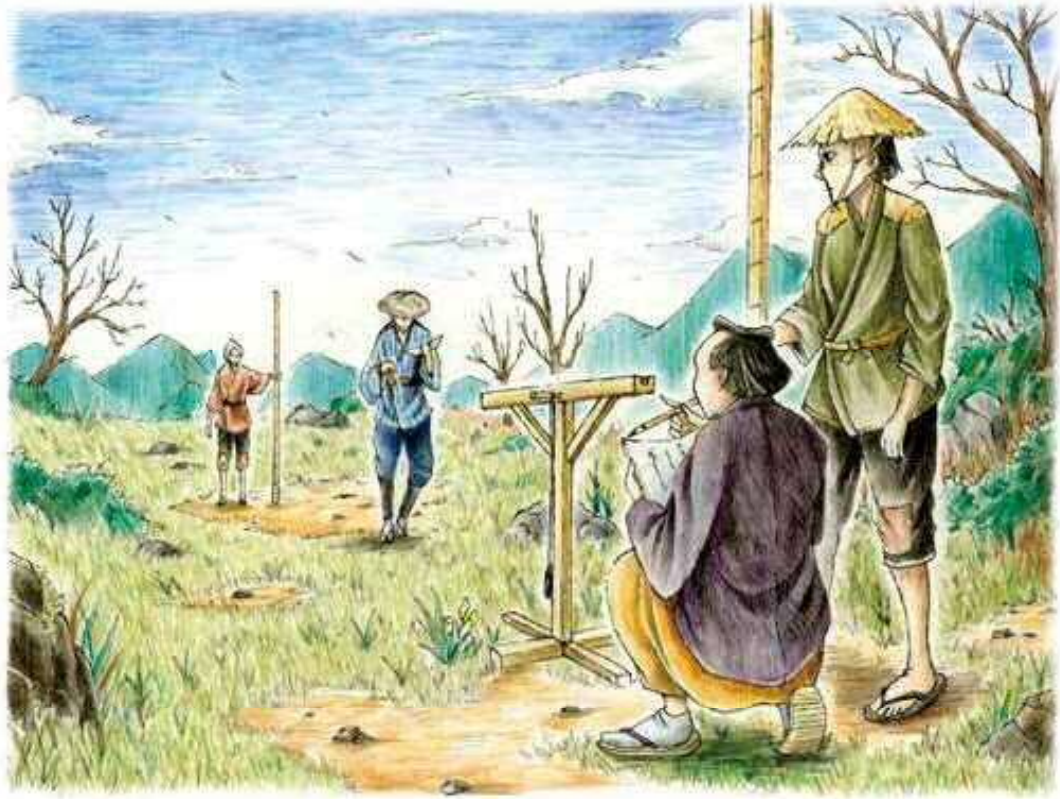
行ってきました。

加東のある地区では、正月二日の朝早く、棒に藁をくくりつけ、村のお宮に持ちよって「わらわら」と声をあわせるめずらしい行事が続いています。

加東市吉馬地区の田んぼの中には、大石が立っています。地元では「笠石さん」とよんで大切に守られている雨乞い地蔵です。これは、日照になりそうになったら、みんなで重い石の笠







を地蔵の頭にかぶせ「雨乞  
い」のお祈りをします。

また、水をもとめている  
いろな取り組みもなされて  
きました。

江戸時代の中ごろ、加東  
市家原の庄屋、平兵衛さん  
は三十七年もかかって測量  
し、鬪龍灘のずっと上から



東条川まで水路を造ろうと  
しました。けれども、殿様  
の許しがなく、残念ながら  
実現しませんでした。

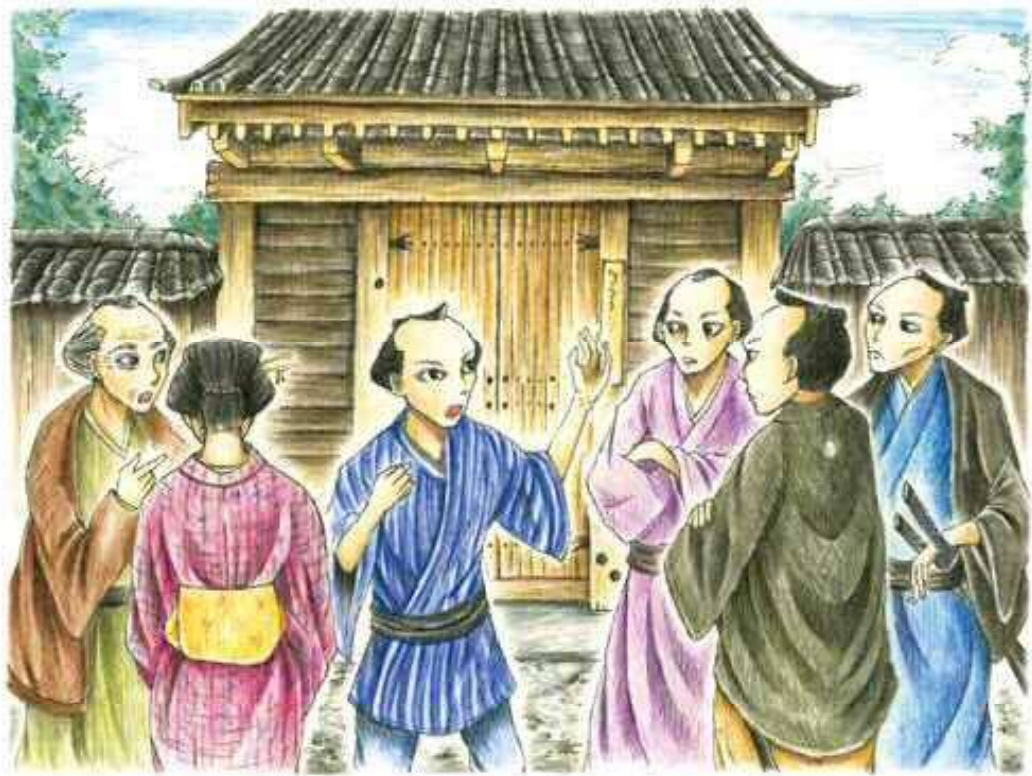
小野市市場の近藤亀蔵さ  
んは、江戸時代に舟で物を  
運ぶ舟運という仕事をして  
財産を築き、たいそう豊か  
になりました。そこで、そ

の財産ざいさんを使って、地域ちいきの人々のために亀池かめいけ・鶴池つるいけという二つの池をつくりました。

中番なかばんの井上いのうえ六蔵ろくぞうさんは、一人で六年もかかってため池をほりました。

東条町とうじょう岩屋いわやに都池みやこいけがあります。この池は江戸時代中ごろ、わずか十六歳さいの中野太左衛門たさゑもんさんという人がつくった池です。太左衛門たさゑもんさんは水不足に苦しむ村のようすをみて役所やくしょにため池づくりをお願いに行ったのですが、年が若いわかから取り合とってくれませんでした。そこで、役所やくしょ

の玄関げんかんに三日間も座り込すわこんで一生懸命いっしょうけんめいうったえたので、役人はその熱意ねついにうたれ、殿様とのさまへの取次とりつぎぎをしてくれました。工事には、近くの村々むらむらからたくさんの人々ひとびとが集まって、池づくりをしました。今でも岩屋の薬師堂やくしどうには太





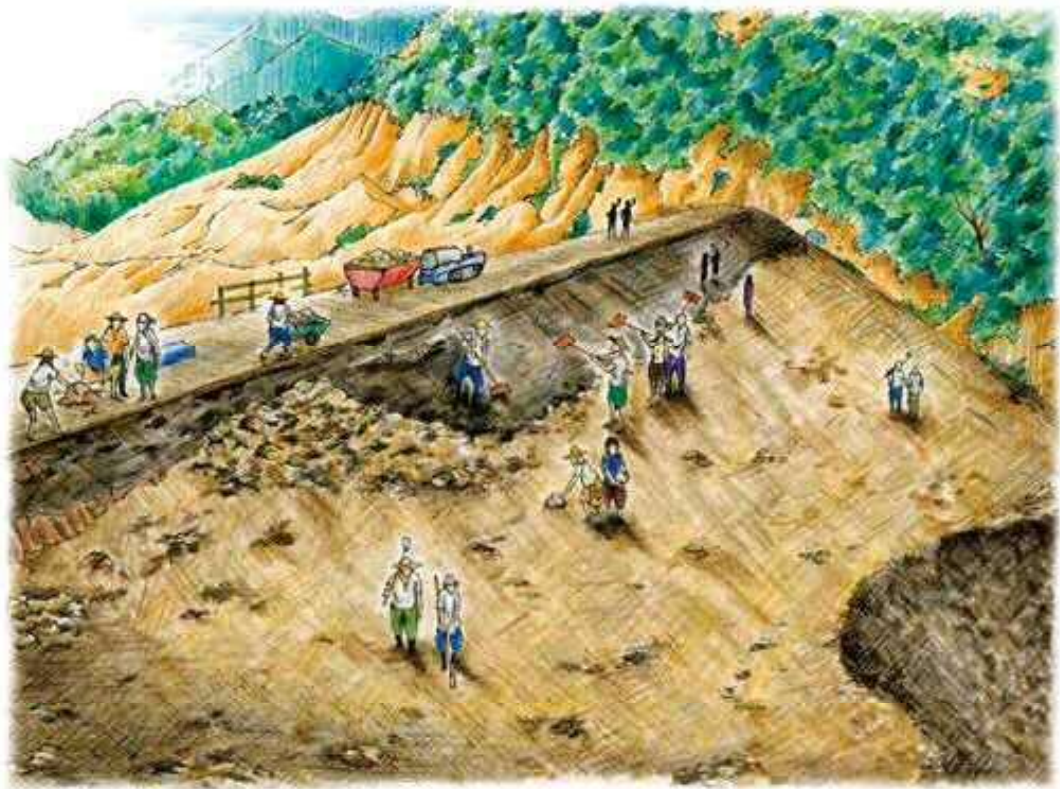
左衛門さんの立派な仕事のことを石碑にきざまれていま  
す。

東条町小沢の庄屋、辻兵七さんは江戸時代の終わりごろ、新しく豊年池をつくり、さらには江戸池などの池の土手を高くつくり直して、となりの村々にも水が届くように工夫をしました。

このように、昔からわたしたちの地域の人々は、米づくりに必要な水をもとめて、工夫しながらおたがいに助け合ってきたのです。

## 安心して米づくりをしたい

これまでも加東と小野と三木では大きな日照りが何度もありました。大正十三年のような大変な日照りはこれまでにないことでした。この時の大きな被害をきっかけに、加東郡福田村の村長、井上萬司さんを中心に上福田・加茂・社・福田の四つの地区がまとまって、国や県にため池をつくるように何度もお願いしました。その結果、三草山のふもとをせき止めて、昭和三年から工事に



取りかかり大きな昭和池  
が完成しました。この工  
事は、堤防をつくるため、  
固い岩山をけずるなど大  
変な工事で、事故で亡く  
なった人も出ました。昭  
和池が完成したことで農  
家の人々の水への心配が  
少なくなりました。

## 土井はため池になる

小野市市場の近藤準吉さんはこれまで  
の経験から日照りには、何よりも大きなため池をつくること

だと強く思っていました。清水寺へのお参りの途中、山  
と山でせまくなった土井の谷を見て

「土井はため池になる！」  
と、考えました。



昭和二十年になり、日本が戦争で敗れ、たくさんの人々が中国大陸や南の島々から帰ってきました。そのころは、日本中に食糧がない時代だったので、国をあげて食糧をふやさなければなりません。そこで、アメリカを中心とする連合軍（GHQ）も食糧増産を計画していたので、新しくダムをつくることが決まりました。そして、鴨川の水をせき止めるには土井がよいということになり、土井地区がダムで沈むことになったのです。この地区は、まわりを山にかこまれ鴨川のせせらぎが聞

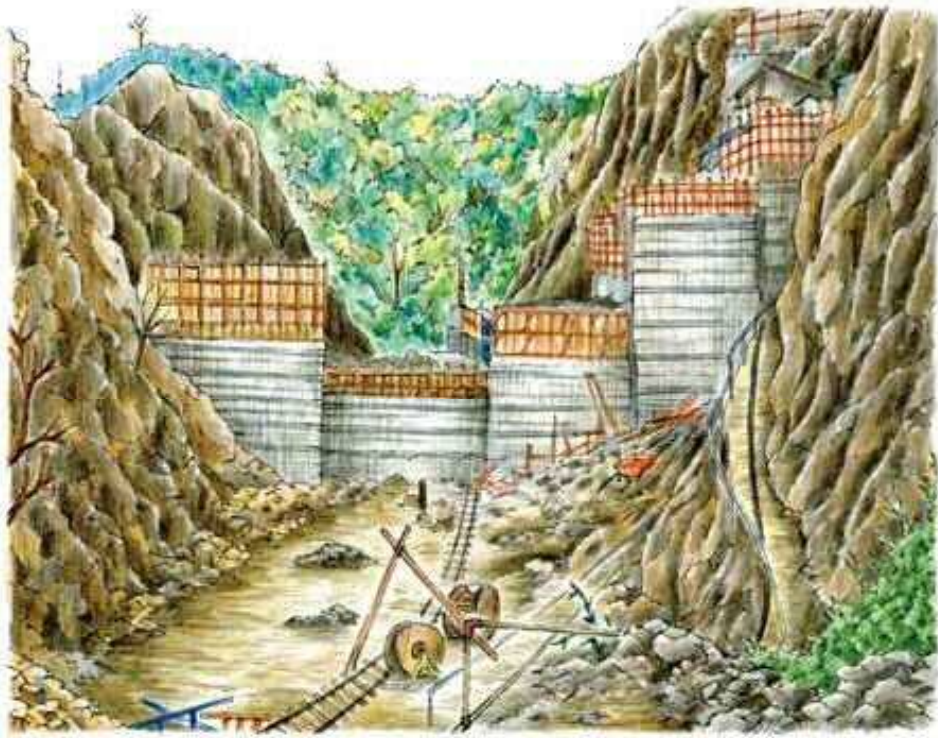


こえるのどかな所でした。  
土井の人たちにとっては  
そんな思い出のふるさとで  
す。先祖が守ったこの土地  
を離れるわけにはいきませ  
ん。人々は悩みに悩み、多  
くの人が助かるのならと、  
受け入れることになりました  
た。鴨川ダム（東条湖）が

できたのは土井地区の人々の決断があったからこそ完成したといえるのです。

鴨川ダムは、戦後初のコンクリートダムでした。戦争のために建設の材料集めが大変でした。工事には初めてパワーショベルやダンプカーなどの新しい道具や機械が使われました。なかでも活躍した二十台のダンプカーは特別注文で、日本のダンプカーのモデルになりました。一番困ったのはコンクリートに使うセメントでしたが、連合軍の応援もあって四百五十トンもの貴重なセメ





ントがすぐに届とどきました。毎日、昼夜なしで工事を進め、五年の年月とのべ六十万人の

人ひと々の力で昭和二十六年に鴨川かもがわダムが完成しました。さらに、このダムだけで





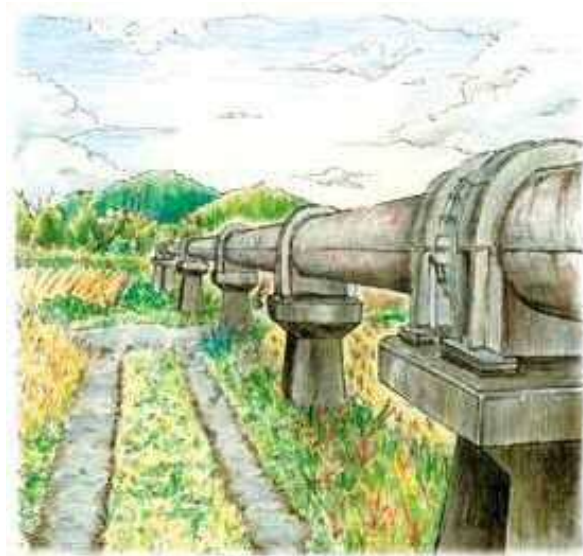
は、十分に水をためられないの  
で、安政池の堤防を長く高くし  
てより大きなため池に造りかえ  
ました。そして、船木池も新し  
く造ったのです。それから水を  
引く水路やポンプ小屋などの工  
事を進め、全体の工事が終わっ  
たのは昭和三十九年のことでし  
た。

こうして、加東と小野と三木に広く水を運ぶ東条川疏水が  
できあがりました。このダムのおかげで農家の人々は、  
干害の不安がなくなって安心して米づくりができる  
ようになりました。

鴨川ダムには、加古川の上流の篠山川からの水も送ら  
れています。加古川の水を何としてでも引きたいと願  
い続けた、江戸時代の平兵衛さんの夢がようやくここに  
実現したのです。

これまで昭和池から水を引いていた地域の一部にも、

鴨川ダムからの水が使われること  
になりました。やがて、千鳥川の  
南にある嬉野台地に送っていた大  
きなサイフォンは、その役割を終  
え、新たに三草川の北にある台地  
に送られるようになりました。



## わたしたちの誇り東条川疏水

郷土の人々は、遠くの台地まで水を送るため、いろいろな特色のある施設を工夫しました。そして、それぞれの時代の最新技術を使って水を引き、荒れ地を現在のよ  
うな豊かな土地に変えてきました。

今では、飲み水も蛇口をひねれば出るのがあたり前の生活です。東条川疏水の水は、その水道水や火事を防ぐ  
防火用水として、農家だけでなく、地域みんなの水とし

て使われていきます。

ずっと昔から引き継  
がれてきた「雨乞い」  
などのお祭りや行事も  
大切にしたいと思いま  
す。

「雨乞いなんて必要  
がなくなつたので、  
もう四十年間もして



いないけど、やっぱりご先祖せんぞの苦しい思いを忘わすれない  
よう、お祭りも復活ふっかつしなければなあ。」

という吉馬よしま地区の人の言葉が心に残りました。

最近さいきんでは、秋津あきつ地区の皆みなさんの努力で「西戸さいど百石ひゃくこく踊おど  
り」という雨乞あまごい踊おどりが復活ふっかつし、地域ちいきの誇ほこりとして子ど  
もたちに引き継つがれています。

いくつもの山や谷をめぐって運ばれてくる水が田畑うらを  
潤うるし作物さくぶつを育てています。今では水不足の不安もなく安  
心して生活ができます。

長い間、先人たちは水をもとめて努力し、実り豊かな郷土づくりを続けてきました。

わたしたちはその努力に感謝し、水の大切さをあらためて考えたいと思います。

文

高松武司

挿絵

藤森太樹

企画監修

南埜 猛

(兵庫教育大学 大学院教授)

東条川疏水ネットワーク博物館会議

(事務局 兵庫県北播磨県民局)

参考文献

「水をもとめて」

(いなみの野ため池ミュージアム監修)





## 遠い水の路

第一刷  
発行

平成二十九年三月発行

兵庫県北播磨県民局加古川流域土地改良事務所

三木市宿原字寺ノ前七〇

TEL 0794-7017006

印刷・製本

株式会社 前田精版印刷



